

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XX, 2016

国際仏教学大学院大学研究紀要
第20号（平成28年）

智顛撰 『維摩經文疏』 訳注（四）

藤
井
教
公

智顛撰『維摩經文疏』訳注（四）

藤井教公

はじめに

筆者は智顛撰『維摩經文疏』の訳注を、順次、本誌第十七号（平成二十五年三月刊）と第十八号（同二十六年三月刊）、第十九号（同二十七年三月）に、それぞれ智顛撰『維摩經文疏』訳注（一）、同（二）、同（三）として発表した。

本稿は、先に刊行した訳注（一）から（三）に続くものである。体裁は前稿を踏襲して、『新纂大日本統感経』第十八卷所収の『維摩經文疏』のテキスト原文を数行のまとまりごとに区切って示し、その部分の訓読を掲げ、次にその部分の訳注を付した。本稿は四七一頁下段十一行目から四七五頁中段九行目までを掲載する。この続きは順次発表していきたい。過誤の多いことを懼れるが、大方の批正を請う次第である。凡例は次の通りである。テキストの解題は智顛撰『維摩經文疏』訳注（一）を参照されたい。

凡例

- 一、テキスト原文には一、二点、レ点などの返り点が施されているが、読点や句点はない。今、返り点を省き、意味に従って句点を施した。
- 一、テキストの文中には頁と段の変わり目にカッコで『新纂大日本統藏経』卷十八の頁と段を示した。
- 一、字体はテキスト部分とその引用、書き下し文、『大正藏経』所収の經典論書の引用部分などは、原則として正字を用いた。それ以外は略字を用いた。
- 一、テキスト文中のゴチック字体部分は『維摩経』の经文部分である。
- 一、テキスト文中の()内の部分は割り注部分を示す。
- 一、書き下し文中のヤマカッコは筆者による補いで、『略疏』との対照によるテキスト欄外注記に従って字を補ったものである。
- 一、守篤本純の『維摩詰経疏籤録』の場所の指示は、巻数と頁数を記し、頁数の次に表の場合は「オ」、裏の場合は「ウ」と記した。
- 一、註に記した典拠の引用文で、引用部分が判然としにくい場合には該当部分に傍線を付した。

【テキスト】『新纂大日本統藏経』卷十八、471c11-472a1 (以下頁、段、行のみを記す)
如是

案此即爲三意。一總明如是意在勸信者。如來如法相解。如法相說。所說誠諦必可信從也。大智論云。佛法大海。

信爲能入。智爲能度。如是者即是信相。又如是是善信之辭。不信者言是事不如是。信者言是事如是。有信之人。入佛法能得四沙門果。其無信者。雖復出家剪落著染衣。讀種種經。能難能答。於佛法中。空無所獲。^①又大智論云。如是者示人無諍之法。佛以無猜心說。弟子以無著心受。故能得解脫。故言如是。非如外道說者以執見心說。聽者以取著心受。現世鬪諍。死入地獄。豈名如是。故智度論偈云。自法愛念故毀咎他人法。雖持戒行人不脫地獄苦也。又古來法師多云。如是者 [471c] 文如理是。文以巧諛爲如。理以無非曰是也。

(1) テキストには「空」の次に「無」の一字があるが、『大智度論』の原文よりして衍字。いま削除する。

【書き下し】

如是

此を案ずるに即ち三意と爲す。一に總じて如是の意は信を勸むるに在るを明かすとは、如來は法相の如く解し、法相の如く説く。所説の誠諦は必ず信從すべきなり。

『大智論』に云く、^①「佛法の大海は信もて能く入ると爲し、智もて能く度ると爲す。如是とは即ち是れ信の相なり。又、如是は是れ善信の辭なり。不信とは是の事、是くの如からざるを言う。信とは、是の事、是くの如くなるを言う。有信の人は佛法に入り、能く四沙門果を得。其の無信なる者は、復た出家して剪落し、染衣を著、種の經を讀み、能く難じ、能く答うると雖も、佛法中において空にして獲る所無し」と。又、『大智論』に云く、^②「如是とは、人に無諍の法を示す」と。佛は無猜の心を以て説き、弟子は無著の心を以て受く。故に能く解脫を得。故に如是と言う。外道の、説く者は執見の心を以て説き、聽く者は取著の心を以て受け、現世に鬪諍し、死して地獄に入るが如くに非ず。豈に如是と名づけんや。故に『智度論』偈に云く、^③「自法の愛念の故に他人の法

を毀せせば、持戒の行人と雖も、地獄の苦を脱れざるなり」と。又、古來の法師、多く云く、「如是とは文は如、理は是なり。文は巧詮を以て如と爲し、理は非無きを以て是と曰うなり」と。

- (1) 『大智論』に云く『大智度論』卷第一に「以故初稱如是語。答曰。佛法大海信爲能入。智爲能度。如是義者即是信。若人心中有信清淨。是人能入佛法。若無信是人不能入佛法。不信者言是事不如是。是不信相。信者言是事如是。譬如牛皮未柔不可屈折。無信人亦如是。譬如牛皮已柔隨用可作。有信人亦如是。復次經中說信如手。如人有手入寶山中自在取寶。有信亦如是。入佛法無漏根力覺道禪定寶山中。自在所取。無信如無手。無手人入寶山中。則不能有所取。無信亦如是。入佛法寶山。都無所得。佛言。若人有信。是人能入我大法海中。能得沙門果不空。剃頭染袈裟。若無信是人不能入我法海中。如枯樹不生華實。不得沙門果。雖剃頭染衣讀種種經能難能答。於佛法中空無所得。以是故。如是義在佛法初。」とある(傍線部が引用相当部分、『大正藏』卷二十五、63a1-17)。
- (2) 四沙門果 声聞修道上の四つの階位。預流果、一來果、不還果、阿羅漢果をいう。
- (3) 剪落し「剪落」は切り落とすの意で、剃髪すること。
- (4) 『大智論』に云く『大智度論』卷第一に「今如是義示人無諍法。問他所說説人無答。以是故諸佛經初稱如是。」とある(同上、64a1)。
- (5) 無倚の心「倚」は「依」に同じ。『詩經』「衛風」淇奥に「倚重較」とあり、『釈文』に「倚、依也」とある。「無依心」で、依存することのない心、の意か。
- (6) 『智度論』偈に云く『大智度論』卷第一に「自法愛染故 皆毀他人法 雖持戒行人 不脱地獄苦」とある(『大正藏』卷二十五、63c4-5)。
- (7) 古來の法師 未検。ただし、吉蔵の『法華義疏』にも次のようにある。

「有人言。如是者文如理是。兩物相似曰如。一物無非曰是。以文能詮於理相似曰如。理則至當無非稱是也。」(『大正藏』卷三十四、452b22-24) 吉藏の引用は「有人言」となっており、具体的人物を指しているようである。また、引用の内容もより詳細である。これらのことを考え合わせると、この引用は灌頂が吉藏疏から後に補ったものという可能性も考えられる。

(8) 巧詮 たくみな言い表し、表現の意味。

【テキスト】 472a1-19

第二約教明如是者。今明四不可説。赴機而有四教。約四教即有四種如是也。一因緣生滅如是。二因緣即空如是。三因緣假名如是。四因緣即中如是。一因緣生滅如是者。佛昔於波羅奈。説五陰生滅。俱隣等聞如是之説。即得悟道。此經復土求聲聞人知有爲法無常。得羅漢果。及得法眼淨。是爲不空出家著染衣能得四沙門果也。

二明因緣即空如是者。如説大品三乘。同見第一義無言説道。斷煩惱。此經破迦旃延明五義。二百比丘聞如是説。心得解脫。即是示人無諍之法也。

三因緣假名如是者。如無量義經云。摩訶般若華嚴海空。宣説菩薩歷劫修行。此經亦云。以無所受而受諸受。若菩薩聞如是説。得道種智。入菩薩位。知衆生根也。

四因緣中道如是者。如大品説。佛以諸法實相故。出現於世。化佛亦以諸法實相故。出現於世。法華經云。諸法實相義已爲汝等説。此經諸菩薩各説入不二相門^①。若菩薩聞如是説。即見佛性。開佛知見。住不思議解脫也。

(1) 『略疏』では「相」を「法」に作る。「此經諸菩薩各説入不二法門」(『大正藏』卷三十八、568b)

【書さ下し】

第二に教に約して如是を明かさば、今、四不可説を明かす。機に赴いて四教有り。四教に約して即ち四種の如是有るなり。一に因縁生滅の如是。二に因縁即空の如是。三に因縁假名の如是。四に因縁即中の如是なり。

一の因縁生滅の如是とは、佛、昔波羅奈に於いて五陰生滅を説きたもう。俱隣等は是くの如き説を聞き、即ち悟道を得。此の經は土を復して聲聞を求むる人は有爲法の無常を知り、羅漢果を得、及び法眼淨を得。是れを空しく出家し、染衣を著せずして、能く四沙門果を得ると爲すなり。

二に因縁即空の如是を明かすとは、『大品』に説くが如く、「三乘同じく第一義無言說道を見、煩惱を斷ず」と。此の經は「迦旃延を破し、五義を明かし、二百比丘、是くの如き説を聞いて心に解脫を得」と。即ち是れ人に無諍の法を示すなり。

三に因縁假名の如是とは、『無量義經』に云うが如し。「摩訶般若、華嚴海空(を説き)、菩薩の歷劫修行を宣説す」と。此の經に亦た云く、「無所受を以て諸受を受く」と。若し菩薩是くの如き説を聞かば、道種智を得て、菩薩位に入り、衆生の根を知るなり。

四に因縁中道の如是とは、『大品』に説くが如し。^⑧「佛は諸法實相を以ての故に世に出現したもう。化佛も又亦た諸法實相を以ての故に世に出現したもう」と。『法華經』に云く、「諸法實相の義は已に汝等が爲に説けり」と。此の經は、諸の菩薩、各、入不二相門を説くに、若し菩薩、是くの如き説を聞かば即ち佛性を見、佛知見を開いて不思議解脫に住するなり。^⑩

(1) 四不可説 大乘『涅槃經』に説かれる「生」と「不生」の四句分別に基づいた四種の不可説。生生不可説、生不生不可説、不生生不可説、不生不生不可説の四種をいう。『法華女義』などに度々用いられる。『涅槃經』徳王品に、「佛言。

天。無量得須陀洹。得斯陀含。得阿那含。得阿羅漢。(『大正藏』卷九、386b35-38)とある。またこの經文は『法華玄義』(『大正藏』卷三十三、807c5-6)や『法華文句』(『大正藏』卷三十四、87c10-11)にも引かれる。

(7) 此の經に亦た云く『維摩經』問疾品に「有餘病。唯有空病空病亦空。是有疾菩薩以無所受而受諸受。未具佛法亦不滅受而取證也。」(『大正藏』卷十四、545a13-15)とある。

(8) 大品に説くが如し『大品般若經』に「佛語須菩提。佛以諸法實相故。與一切衆生天及人作福田。化佛亦以諸法實相故。與一切衆生天及人作福田」(『大正藏』卷八、375a6-8)とあり、また「佛告須菩提。知諸法實義故名爲佛。復得諸法實相故名爲佛。」(同前、379a15-16)とある。

(9) 『法華經』に云く 序品に「諸法實相義 已爲汝等説」(『大正藏』卷九、5a10)とある。

(10) 此の經は……住するなり。「入不二相門」は入不二法門品で説かれる入不二法門に同じ。「住不思議解脫」は不思議品に「唯應度者乃見須彌入芥子中。是住不思議解脫法門」(『大正藏』卷十四、546b29)とある。「開佛知見」は『妙法華』方便品の語(『大正藏』卷九、7a24)。

【テキスト】 472a19-b17

佛法有此四種如是義。故一切衆經之初。皆安如是。若華嚴經頓教。有因緣假名中道二種如是。若三藏教聲聞經。但有一因緣生滅如是。若諸方等大乘具有四種如是。若摩訶般若除生滅如是。具有三種如是。法華經但因緣中道實相一種如是。若大涅槃明諸佛法界。亦具足四 [472b] 種如是。此經猶是方等大乘。生蘇不定之說。具有四種如是。如上所引經文。此經既具四如是。經初標如是之言也。

問曰。理無二。是何得有四如是。

答曰。諸法畢竟不可説。非權非實。尚無一如是。何況有四。而權而實者。權故説三如是。實故説一如是。權

實備明則有四如是也。

第三觀心明如是義者。即是三觀明四如是也。如前引華嚴經云。欲知如來心。但觀衆生心。若見如來心。即見衆生心。如破一微塵出三千大千世界經卷也。衆生一念。無明因緣所生之心。即具四種如是之理。若觀心因緣生滅從假入空。即是生滅如是。若觀心因緣即空。體假入空即是空真諦如是。若觀心因緣。知空非空。入假無滯即假名如是。若觀心因緣即一實諦佛性。即是中道如是也。是爲約觀心具四種如是義也。

問曰。若觀心即具四如是者。應即是佛菩薩也。

答曰。當用六即分別。進不叨濫生增上慢。退免貧人數寶無分之失也。

(1) 底本には「滅」の次に「生」の一字あるも、意味上からして衍字。今、削除する。『略疏』にも「若觀心因緣生滅入空。即生滅如是即空。即假即中例說可知」(『大正藏』卷三十八、5682122)とある。

【書き下し】

佛法に此の四種の如是の義有り。故に一切衆經の初に、皆如是をを安く。華嚴經頓教の如きは因緣假名と中道の二種の如是有り。三藏教聲聞經の如きは但だ一の因緣生滅の如是有り。諸の方等大乗の如きは具さに四種の如是有り。摩訶般若の如きは生滅の如是を除き、具さに三種の如是有り。法華經は但だ因緣中道實相一種の如是なり。大涅槃の如きは諸佛の法界を明かし、亦た四種の如是を具足す。此の經は猶お是れ方等大乗、生蘇不定の説にして、具さに四種の如是有り。上に所引の經文の如し。此の經は既に四の如是を具す。經の初に如是の言を標するなり。

問うて曰く、「理に二の是無し。何ぞ四の如是有るを得んや」と。

答えて曰く、「諸法は畢竟不可説にして非權、非實なり。尚、一の如是無し。何ぞ況や四有らんや。而して權、而して實なれば、權なるが故に三如是を説く。^⑥實なるが故に一如是を説く。^⑦權實備さに明かならば則ち四如是有るなり」と。

第三に觀心に如是の義を明かすとは、即ち是れ三觀もて四如是を明かすなり。前に華嚴經を引いて云うが如し。^⑧「如來心を知らんと欲さば、但だ衆生心を觀ずべし。若し如來心を見れば、即ち衆生心を見る。一微塵を破して三千大千世界の經卷を出すが如きなり」と。

衆生の一念は無明因緣所生の心なり。即ち四種の如是の理を具す。若し因緣生滅を觀心せば假従り空に入る。即ち是れ生滅の如是なり。若し因緣即空を觀心せば假を體して空に入る。即ち是れ空の真諦の如是なり。若し因緣を觀心せば空・非空を知り、假に入りて滯り無し。即ち假名の如是なり。若し因緣即一の實諦佛性を觀心せば、即ち是れ中道の如是なり。是れを觀心に約して具さに四種の如是の義を具すと爲すなり。

問うて曰く、「若し心を觀ぜば即ち四如是を具すとは、應に即ち是れ佛菩薩たるべきや」と。

答えて曰く、「當に六即^⑨を用いて分別し、進みては叨濫^⑩して増上慢を生ぜず、退しては貧人寶を數えるに分無きの失を免るべきなり」と。

(1) 但だ一の因緣生滅の如是有り 化法四教のうちの三藏教は、説法の順序から言えば、華嚴に続いて第二時の説法であるが、ただ因緣生滅一種類の教説のみを説くので、一つの如是しかないという。

(2) 諸の方等大乗の如きは……四種の如是有り 方等大乗は一代五時の説法順では第三方便時に相当し、大小二乗が対説され、教説内容に藏教・通教・別教・円教の四教が併説されている。それで四種の如是があるという。

(3) 摩訶般若の如きは……三種の如是有り 第四時の般若時は、一切空を説いて大小二乗の差別を払拭する。したがって

- 小乗は存在せず、みな大乘であるが、その中に通・別・円の三教が存在するので三種の如是があるという。
- (4) 大涅槃の如きは……四種の如是を具足す 『涅槃經』は『法華經』とともに第五時の説法であるが、『法華經』が純円であるのに対し、『涅槃經』は追説追浪の説なので、四教を重説する。それで四種の如是があることになる。
- (5) 生蘇不定の説 『維摩經』は五時の説法では第三の方等時の教、五味からいえば生蘇味に相当する。またその説法を聞いて得る利益が人によって異なるので、化儀の四教からいえば不定教に相当する。
- (6) 三如是を説く 因縁生滅の如是、因縁即空の如是、因縁假名の如是をいう。
- (7) 一如是を説く 因縁即中の如是のこと。
- (8) 『華嚴經』を引いて云うが如し 『六十華嚴』に「彼三千大千世界等經卷。在一微塵内。一切微塵亦復如是。時有一人出興於世。智慧聰達。具足成就清淨天眼。見此經卷在微塵内。作如是念。云何如此廣大經卷在微塵内。而不饒益衆生耶。我當勤作方便破彼微塵。出此經卷饒益衆生。爾時彼人。即作方便破壞微塵。出此經卷饒益衆生。」(中略) 欲知如來心應解最勝智 如來智無量 最勝心亦然」(『大正藏』卷九、221a7-28)とある。
- (9) 六即 円教における修道の階位。理即、名字即、觀行即、相似即、分真即、究竟即の六位をいう。
- (10) 叨濫 「叨」も「濫」も同義の字義で、「みだりに…する」、「思い上がって…する」「混乱する」の意。『法華玄義』にも「八善識次位者。雖修如此正助等法。不得即言我是聖人。叨濫眞似不識賢聖」(『大正藏』卷三十三、786c20-21)などとなり、『摩訶止観』にも「非淨非不淨。枯榮雙遣而入涅槃。學諸對治助開三脫。明識六即不起叨濫我所觀眼雖具五眼。但是名字但是觀行」(『大正藏』卷四十六、101b3-5)などの用例がある。

【テキスト】 472b18-473a12

我聞

此即是阿難等諸弟子。親所聞法。故謂我聞。今解亦爲三意。一總釋。二別約教釋。三約觀心。

第一總釋者。阿難親承音旨。故言我聞。所以然者。若傳從佗聞多致偽謬^①。師心自說何必定合道理。今既親聞佛說。是則可信。群情承受無所致疑也。大智度論云。隨俗故說我。和合故稱聞。隨俗故說我者。諸[472c]無學人及見道學人。無傳持佛法利益衆生。故順俗說我。外宜順俗無諍。內不乖實法。故得傳經利物。譬如用金錢買銅錢。賣買法爾。人無恠也。和合故稱聞者。耳根不壞。聲在可聞處。意欲聞情塵和合。耳識即生。意識能分別種種所聞。是則和合。故稱聞也。阿難等內則耳根聰利。外則對佛八音清辯領納無遺。故稱我聞也。

問曰。大智論云。阿難是佛得道夜生。涅槃明。佛成道後過二十年。阿難方爲給使。自爾之前佛說經。阿難不聞。如來將入涅槃。阿難爲魔所蔽。亦不得聞。云何皆稱如是我聞。

答曰。大智論云。阿難將欲結集法藏。合掌向佛涅槃處。而說偈言。佛初說法時。爾時我不見如是。展轉聞乃至波羅奈。展轉聞者解有二意。一舍利弗問經云。阿難修不忘禪。得佛覺三昧。以三昧力。自能尋佛言說。展轉至波羅奈。悉皆聞持。故言我聞也。

二解云。阿難所未聞經。佛次第爲說。乃至波羅奈。故云我聞也。何以得知然。阿難本願爲佛侍者。聞持佛經。如賢愚經所明。阿難宿世本爲長者。因施食故發願。爲聞持弟子。又報恩經說。阿難從佛求乞四願。三願如大涅槃說。第四願者。佛所說經未聞之者。更請爲說。佛可其願。有所不聞重爲說也。阿難所傳有八億四十萬卷。皆言我聞。復次大智論明。結集法藏。優波離等各登高座。皆稱如是我聞。未必並是阿難也。

問曰。阿難但結集小乘經[473a]稱我聞。亦結集大乘經稱我聞耶。

答曰。解者不同。有言。阿難但結集小乘稱我聞。諸大乘經。是文殊師利彌勒等諸大菩薩所共結集。稱我聞也。

又解言。阿難非但止結集小乘。亦結集共二乘說大乘經。故大品付屬阿難。此經亦爾。其不共二乘說者。大菩薩結集也。又云。阿難亦結集不共二乘說大乘經。如正法念經云。阿難有三稱。一阿難賢。二阿難持。^④三阿難海。今謂若阿難賢者。聞持三藏教。阿難持者。聞持共二乘說大乘法。阿難海者。聞持不共二乘說大乘經也。故法華云。阿難聞佛授記。即時憶念過去無量千萬億諸佛法藏。如今所聞。亦識本願。豈不能備持一佛之教也。

(1) 「佗」は「他」の音通。『略疏』には「若傳從他聞多致僞謬」(『大正藏』卷三十八、5682c)とある。

(2) テキスト欄外注記に「意上疑脫作字」とあり、『略疏』にも「聞者。耳根不壞作意欲聞情塵和合耳識即生」(同前書、5692c-3)とあるが、この部分は『大智度論』の「意欲聞情塵意和合故耳識生」(『大正藏』卷二十五、643a)を踏まえての表現と思われるので、今は採らない。

(3) テキストに「師」の字なし。欄外注記に「殊下疑脫師字」とある。今、補う。

(4) テキストに「二」字なし。欄外注記に「阿上疑脫二字」とあり、意味上からも今、補う。

【書き下し】

我聞

此れ即ち是れ阿難等の諸の弟子、親しく聞く所の法なるが故に、「我聞けり」と謂う。今、解すに亦た三意と爲す。一には總じて釋す。二には別して教に約して釋す。三には觀心に約す。

第一の總じて釋すとは、阿難は親しく音旨を承くるが故に「我聞けり」と言う。然る所以は、若し傳うるに従り聞くこと多ければ、偽謬を致す。心を師とすれば自說何ぞ必定して道理に合わんや。今、既に親しく佛説を聞けり。是れ則ち信ずべし。群情、承受して疑を致す所無きなり。『大智度論』に云く、^①「俗に隨うが故に我と説

く。和合の故に聞と稱す。俗に隨うが故に我と説くとは、諸の無學人及び見道の學人、佛法を傳持し衆生を利益すること無きが故に、俗に順じて我と説く。外には宜しく俗に順じて諍い無く、内には實法に乖からざるべし。故に經を傳え、物を利することを得。譬えば金錢を用いて銅錢を賣うに賣買は法爾にして、人恠しむこと無きが如くなり」と。

「和合の故に聞と稱す」とは、耳根壞せず。聲は聞くべき處に在り。意、聞かんと欲して情・塵和合して、耳識即ち生じ、意識能く種種の所聞を分別す。是れ則ち「和合の故に聞と稱す」るなり。

阿難等、内には則ち耳根聰利に、外には則ち佛の八音清辯に對して領納すること遺り無きが故に「我聞けり」と稱するなり。

問うて曰く、『大智論』に云く、「阿難は是れ佛の得道の夜に生まる」と。『涅槃』の明さく、「佛の成道後二十年を過ぎて、阿難方に給使と爲れり」と。爾れよりの前に佛の説經を阿難は聞かず。如來將に涅槃に入らんとするに、阿難は魔の蔽ふ所と爲り、亦た聞くことを得ず。云何が皆、「是くの如く我聞けり」と稱するや。

答えて曰く、『大智論』に云く、「阿難、將に法藏を結集せんと欲して、合掌して佛涅槃の處へ向かいて、偈を説いて言わく、「佛の初めて説法する時、爾の時、我れ見えず。是くの如く展轉して聞き、乃ち波羅奈に至る」と。

展轉して聞くとは、解に二意有り。一には『舍利弗問經』に云く、「阿難は修するに禪を忘れず、佛覺三昧を得たり」と。三昧力を以て自ら能く佛の言説を尋ね、展轉して波羅奈に至る。悉く皆な聞持するが故に「我聞」と言うなり。

二に解して云く。阿難の未だ聞かざる所の經、佛、次第に爲に説き、乃ち波羅奈に至る。故に我聞と云うなり。何を以て然りと知ることを得んや。阿難は本より佛の侍者と爲つて佛の經を聞持せんと願えり。『賢愚經』の明

かす所の如し。^⑩阿難の宿世は本と長者たり。食を施すに因るが故に願を發せり。「聞持の弟子と爲らん」と。又、『報恩經』に説く。^⑪「阿難は佛に従い、四願を求め乞う」と。三願は『大涅槃』に説くが如し。^⑫第四願は、佛の所説の經の未だ聞かざるのもの、更に爲に説きたまえと請う。佛、其の願を可とせり。聞かざる所有るを重ねて爲に説きたもうなり。阿難の傳うる所、八億四千萬卷有り。皆「我聞」と言う。復た次に『大智論』に明かす。^⑬「法藏を結集するに、優波離等、各、高座に登り、皆、如是我聞と稱せり」と。未だ必ずしも並びに是れ阿難ならざるなり。

問うて曰く。阿難は但だ小乘經のみを結集して「我聞」と稱す。亦た大乘經を結集して「我聞」と稱するやと。答えて曰く。解は同じからず。有るの言わく。阿難は但だ小乘を結集して「我聞」と稱す。諸の大乘經は、是れ文殊師利・彌勒等の諸の大菩薩の共に結集して「我聞」と稱する所なりと。

又解して言わく、阿難は但だ小乘を結集するに止まるに非ず。亦た共、二乘説の大乘經を結集せり。故に大品は阿難に付屬す。此の經も亦た爾り。其の二乘説に共せざるものは、大菩薩の結集なりと。

又云く。^⑭阿難は亦た不共、二乘説の大乘經も結集せり。『正法念經』に云うが如し。^⑮「阿難に三稱有り。一に阿難賢。二に阿難持。三に阿難海なり。今、阿難は賢の若しと謂うは、三藏教を聞持すればなり。阿難持とは、共、二乘説の大乘法を聞持すればなり。阿難海とは、不共、二乘説の大乘經を聞持するなり。故に『法華』に云く、^⑯「阿難、佛の授記を聞き、即時に過去無量千萬億の諸佛の法藏を憶念す」と。今の聞く所の如し。亦た本願を識る。豈に一佛の教を備さに持する能わざるや。

(1) 『大智度論』に云く 同論卷第一に「佛弟子輩雖知無我。隨俗法說我。非實我也。如以金錢買銅錢人無笑者。何以故。

賣買法應爾。言我者亦如是。於無我法中而說我。隨世俗故不應難。如天問經中偈說隨世故用一種語。佛弟子隨俗故說我

無有答。復次若人著無吾我相。言是實餘妄語。是人應難。汝一切法實相無我。聞者今當說。問曰。聞者云何。聞用耳根聞耶。用耳識聞。用意識聞耶。若耳根聞。耳根無覺知故不應聞。若耳識聞。耳識一念故不能分別。不應聞。若意識聞。意識亦不能聞。何以故。先五識識五塵。然後意識識。意識不能識現在五塵。唯識過去未來五塵。若意識能識現在五塵者。盲聾人亦應識聲色。何以故。意識不破故。答曰。非耳根能聞聲。亦非耳識亦非意識能聞聲。事從多因緣和合故得聞聲。不得言一法能聞聲。何以故。耳根無覺故不應聞聲。識無色無對無處故。亦不應聞聲。聲無覺亦無根故不能知聲。爾時耳根不破。聲至可聞處。意欲聞情塵意和合故耳識生。隨耳識即生意識。能分別種種因緣得聞聲」(『大正藏』卷二十五、6416c-43)とある。

(2) 情・塵和合して……所聞を分別す 「情」とは認識主観のこと。ここでは具体的には六根のうちの耳根をいう。「塵」は認識の対象としての六境をいうが、ここでは声のこと。耳根と声境が接触し、それによって聴覚による認識が成立し、その認識内容を意識が種種に分別する、の意。

(3) 八音清辯 八音とは、仏の音声が見える柔軟音などの八種の特徴。清辯とは、清らかな弁舌。八音を具えた仏の清らかな弁舌、の意。

(4) 『大智論』に云く 同論卷第三に、阿難は釈尊の父、淨飯王の弟である斛飯王の子として、仏の成道の日に生まれたという記述がある。「王言我子雖捨轉輪聖王。今得法轉輪王定得大利無所失也。王心大歡喜。是時斛飯王家使來白淨飯王。言。貴弟生男。王心歡喜言。今日大吉。是歡喜日。語來使言。是兒當字爲阿難」(『大正藏』卷二十五、82a81c)
(5) 『涅槃』の明さく 南本『涅槃經』憍陳如品に「善男子。我成佛已過二十年。往王舍城。爾時我告諸比丘言。諸比丘。今此衆中誰能爲我受持如來十二部經。供給左右所須之事。(中略)阿難言。吾已爲汝啓請三事。如來大慈皆已聽許。阿難言。大德。若佛聽者請往給侍。」(『大正藏』卷十二、849b8-c23)とある。

(6) 阿難は魔の……聞くことを得ず 仏の入滅三ヶ月前に現れた悪魔に阿難がたばらかされて、仏の言葉に正しい応答が

できなかつたことをいう。竺三法護訳とされる『般泥洹經』には「如是阿難。佛四神足。已多習行。專念不忘。在意所欲。如來可止一劫有餘。佛重說是至再三。時阿難意沒在邊想。爲魔所蔽。矇矓不悟。默而不對」(『大正藏』卷一、180b18-21)とあり、また、『長阿含』の『遊行經』にも「爾時阿難默然不對。如是再三。又亦默然。是時阿難爲魔所蔽矇矓不悟。佛三現相。而不知請」(同前書、15b24-26)とある。

(7) 『大智度論』に云く『大智度論』卷三に「長老阿泥盧豆言。是長老阿難。於佛弟子常侍近佛。聞經能持佛常歡譽。是阿難能結集經藏。(中略)是時長老阿難一心合手。向佛涅槃方。如是説言。佛初説法時。爾時我不見。如是展轉聞。佛在波羅奈。佛爲五比丘初開甘露門」(『大正藏』卷二十五、69a24-b14)とある。

(8) 『舍利弗問經』に云く。同經に「唯阿難修不忘禪。宿習總持。於少時中得佛覺三昧」(『大正藏』卷二十四、902c20-21)とある。

(9) 波羅奈 ベナレスのこと。Varanasiの音写。釈尊の初転法輪の場所、鹿野苑はこの地にある。

(10) 『賢愚經』の明かす所の如し。同經卷第十に「佛告比丘。爾時師者。定光佛是。時沙彌者。今我身是。時大長者。供養食者。今阿難是。乃由過去造是行故。今得總持。無有忘失」(『大正藏』卷四、417b68)とあって、過去世に釈迦仏が定光仏のもとで沙彌であつた時に、長者として食を供養したその長者が今の阿難であると説かれてゐる。

(11) 『報恩經』に説く『大方便佛報恩經』卷第六、優波難品に「凡言如是我聞者。佛在時言。我聞爲是滅後也。撰法藏者言我聞。佛二十年中説法。阿難不聞。何得言我聞。答曰。云語天語阿難。又云。佛入世俗心令阿難知。又云。從諸比丘邊聞。又云。阿難從佛請願。①願佛莫與我故衣。②莫令人請我食。我爲求法恭敬佛故。侍佛所須不爲衣食。③諸比丘晨暮二時。得見世尊。莫令我爾。欲見便見。④又佛二十年中所説法盡爲我說」(『大正藏』卷三、155c17-26)とある。阿難は仏の初転法輪から二十年の間の説法は聞いていないのに、どうして「我聞」と言えるのかという問いに対して四つの答えを挙げているが、その第四番目に阿難の仏に対する誓願として①から④までの四願を挙げており、その第四願に、

自分が聞くことのできなかった二十年間の説法をすべて説いてくれるように懇請している。

- (12) 三願は『大涅槃』に説くが如し。南本『涅槃經』憍陳如品に「阿難聞已合掌長跪作如是言。諸大德。若有是事如來世尊與我三願。當順僧命給事左右。目鍵連言。何等三願。阿難言。一者如來設以故衣賜我聽我不受。二者如來設受檀越別請聽我不往。三者聽我出入無有時節。如是三事佛若聽者。當順僧命」(『大正藏』卷十二、849c-11)とある。すなわち、①仏が自分にお下がりの衣を賜ろうとされても、自分はそれを受けなくてもよいこと、②仏が檀越の招待を受けても、それに自分が同行しなくてもよいこと、③いつでも仏の居室への出入りが許されること、の三願である。

- (13) 復次に『大智論』に明かす『大智度論』卷三に「我等今請。即請言。起就師子座處坐説。佛在何處初説毘尼結戒。憂婆離受僧教。師子座處坐説。如是我聞一時佛在毘舍離」(『大正藏』卷二十五、693c-11)とあり、優波離が比丘達の命を受けて高座に上り、「如是我聞」と説いたという。

- (14) 有るの言わく。この説、不詳。吉藏の『三論玄義』には「智度論云。迦葉阿難結集三藏。文殊彌勒集大乘藏」(『大正藏』卷四十五、3239-1a1)とある。しかし、『大智度論』では次注の引文に掲げるように、「有る人」の説として、文殊・彌勒は阿難と大乘を結集したとある。同じ吉藏の『法華玄論』では「又釋論云。佛滅後迦葉與阿難結集三藏。文殊彌勒亦與阿難結集摩訶衍藏」(『大正藏』卷三十四、3827c)とあって、ここでは『大智度論』を正しく引いている。

- (15) 又解して言わく『大智度論』卷百に「復次有人言。如摩訶迦葉將諸比丘在耆闍崛山中集三藏。佛滅度後。文殊尸利彌勒諸大菩薩。亦將阿難集是摩訶衍。又阿難知籌量衆生志業大小。是故不於聲聞人中説摩訶衍」(『大正藏』卷二十五、756014-18)とあり、「有る人」の説として、仏滅後に文殊・彌勒の大菩薩が阿難と摩訶衍を結集したとある。この『大智度論』の文に直接拠ったか、あるいはこれを引いた別の人師の説を引いたかであろう。

- (16) 又云く。この説、不詳。

- (17) 『正法念經』に云うが如し『正法念經』は安世高訳『佛說分別善惡所起經』の別称。しかし、同経には該当する記述

は見当たらない。また元魏の瞿曇般若流支訳『正法念處經』にも見当たらない。ただし、『法華文句』には「又正法念經。明三阿難。阿難陀此云歡喜。持小乘藏。阿難跋陀此云歡喜賢。受持雜藏。阿難娑伽此云歡喜海。持佛藏。阿含經有典藏阿難。持菩薩藏。蓋指一人具於四德。傳持四法門其義自顯云云」（『大正藏』卷三十四、420c25）と、テキストとほぼ同文がある。

(18) 故に『法華』に云く『妙法蓮華經』五百弟子受記品第八に「我已得成阿耨多羅三藐三菩提。而阿難護持我法。亦護將來諸佛法藏。教化成就諸菩薩衆。其本願如是。故獲斯記。阿難面於佛前。自聞授記及國土莊嚴。所願具足。心大歡喜得未曾有。即時憶念過去無量千萬億諸佛法藏。通達無礙如今所聞。亦識本願」（『大正藏』卷九、302b-11）とある。

【テキスト】 473a12-165

第二別釋我聞者。即爲二意。一約四教明我。二約四教明聞。

一約四教明我者。亦有四種不同。一約三藏教明我者。依薩婆多。五陰實無有我。但有名。若依曇無德說。有假我。犢子所明我。在第五不可說藏。如是等明我。雖殊而悉破。外人計神我及性我。說假名等我義也。

二通教明我者。如大品經云。色性如我性。我性如色性。如我但有字。色亦但有字。我之與色。皆如幻化也。

三別教明我者。但以自在爲我義也。善於知見。得無罣礙。無罣礙者。即是自在我義也。又攝大乘論明自佗差別識。亦名似我識。即是別教明我義也。

四圓教明我者。中道佛性即我義也。中論云。佛或時說於我。或時說無我。於佛正法中。無我無〔473b〕非我。此經云。於我無我而不一。是真無我義。大涅槃經云。無我法中說真我義也。又云。我與無我。其性不一。不二之性即是實性。實性者即是二十五有真我也。前三教明我。即是權我。無我法中說真我者。即是圓教明眞實我也。隨教辯我故言我聞。

【書き下し】

第二に別して「我聞」を釋すとは、即ち二意と爲す。一には四教に約して我を明かす。二には四教に約して聞を明かす。

一に四教に約して我を明かすとは、亦た四種の不同有り。一には三藏教に約して我を明かすとは、薩婆多に依るに五陰は實には我有ること無し。但だ名のみ有り。若し曇無徳の説に依れば假我有り。犢子の明かす所の我は、第五不可説藏に在り。^④是くの如き等の我を明かすは殊なると雖も、而も悉く外人の神我及び性我を計するを破す。假名等、我の義と説くなり。

二に通教に我を明かすとは、『大品經』に云うが如し。^⑥「色の性は我の性の如し。我の性は色の性の如し。我の如きは但だ字有るのみ。色も亦た但だ字有るのみ。我これと色と、皆な幻化の如きなり」と。

三に別教に我を明かすとは、但だ自在を以て我の義と爲すなり。知見を善くし無罣礙を得。無罣礙とは即ち是れ自在我の義なり。又『攝大乘論』に自佗差別識を明かす。^⑦亦た似我識と名づく。即ち是れ別教に我の義を明かすなり。

四に圓教に我を明かすとは、中道佛性即ち我の義なり。『中論』に云く、^⑧「佛、或る時、我を説き、或る時無我を説きたもう。佛の正法中には我無く非我無し」と。此の經に云く、^⑨「我・無我において而も不二、是れ眞の無我の義なり」と。『大涅槃經』に云く、^⑩「無我法中に眞の我の義を説くなり」と。又云く、^⑪「我と無我と、其の性は不二なり。不二の性は即ち是れ實性なり」と。實性とは即ち是れ二十五有の眞我なり。前の三教の我を明かすは即ち是れ權、我・無我の法中に眞我を説くは、即ち是れ圓教に眞實の我を明かすなり。教に隨て我を辯ずるが故に「我聞」と言う。

- (1) 薩婆多 説一切有部のハヤ。Sarvaśivādin の音写。
- (2) 曇無徳の説 法上部 (Dharmottariya) の説を指すか。法上部は、上座部—説一切有部—犢子部の流れから分派した部派。法尚部とも。吉蔵『三論玄義』に「更各各造論取經中義足之。所執異故。故成四部。一法尚部。即舊曇無徳部也。二賢乗部。三正量弟子部。有大正量羅漢。其是弟子。故名正量弟子部。此三從人作名。四名密林部。從住處作名也」(『大正蔵』卷四十五、9c12-16) とある。しかし望月『佛教大辭典』5ではこれを誤りとし、曇無徳部は法蔵部のこととする(4628頁)。法蔵部 (Dharmaguptaka) は法護部ともいい、上座部—説一切有部—化地部の流れから分派し、經律論の三蔵に菩薩蔵と呪蔵の二蔵を加えた五蔵を伝持していたという。『三論玄義』に「三百年中從正地部又出一部。名法護部。其本是目連弟子。得羅漢恒隨目連往色界中。有所說法皆能誦持。自撰爲五蔵。三蔵如常。四咒蔵。五菩薩蔵。有信其所説者。故別成一部也」(同前、9c20-24) とある。
- (3) 犢子明かす所の我 犢子部 (Vātsīputriya) は説一切有部から分派した部派で、五蘊のほかに非即非離蘊の「我」(Pudgala、補特伽羅) を立て、輪廻の主体や統一的自己について説明しようとした。
- (4) 第五不可説蔵に在り 『中論』卷二、觀三相品に「若人説我相。如犢子部衆説。不得言色即是我。不得言離色是我。我在第五不可説蔵中」(『大正蔵』卷三十、5c28-29) とある。また、『成実論』には犢子部の説に相当するものとして、「又汝法中説。可知法者。謂五法蔵。過去未來現在無爲。及不可説法。我在第五法中。則異於四法」(『大正蔵』卷三十一、260c9-11) とある。さらに『法華玄義』卷八下には或る人の説として「有人言。犢子阿毘曇申此意。彼論明我在第五不可説蔵中。我非三世故非有我。非無爲故非無我。此恐未可定用也」(『大正蔵』卷三十三、784c12-14) とある。
- (5) 外人の神我及び性我 外人とは仏教外の外道の論者をいう。神我とはサンキヤやヴァイシエーシカ学派で説く常住不変の我。身内に神我的存在を主張する論者を神我外道という。性我については不詳。淨影寺慧遠の『大乘義章』に

「二是我相。我有二種。一法著我。謂取性心。於根塵識。妄立定性。此之性我。起信論中。名執取相。又亦名爲執相應染。二人著我。於陰界入計我我所。起信論中。名此以爲計名字相。隨逐我人衆生等名。妄有建立我相如是」(『大正藏』卷四十四、526b26-c1) とあるような、存在の根底に内在する我をいうか。

(6) 『大品經』に云うが如し 羅什訳『大品般若經』卷一に「佛亦但有字。般若波羅蜜亦但有字。色但有字受想行識亦但有字。舍利弗。如我但有字。一切我常不可得」(『大正藏』卷八、221c13-16) とある。經文は引用文と少しく異なるが、『法華玄義』卷八下では、「大品云。色性如我性我性如色性。此二皆如幻化」(『大正藏』卷三十三、782c33-26) とあって、今の引用文に近い經文引用がある。またこれは、智顓の『觀音玄義』(『大正藏』卷三十四、878c21)、や『金光明經文句』(『大正藏』卷三十九、696c3-14) の中にも見られる。

(7) 『攝大乘論』に……明かす 真諦訳『攝大乘論』卷上に「何者爲差別。謂身識。身者識。受者識。應受識。正受識世識。數識。處識。言說識。自他差別識。善惡兩道生死識。身識身者識受者識應受識正受識世識數識處識言說識。如此等識因言說熏習種子生。自他差別識。因我見熏習種子生」(『大正藏』卷三十一、1182d-29) とある。

(8) 『中論』に云く 同論の觀法品に「諸佛或說我 或說於無我 諸法實相中 無我無非我」(『大正藏』卷三十、242d-2) とある。

(9) 此の經に云く 『維摩經』弟子品に「於我無我而不二。是無我義。法本不然。今則無滅。是寂滅義」(『大正藏』卷十四、541a20-21) とある。

(10) 『大涅槃經』に云く 南本卷三十四、迦葉菩薩品に「無我法中有真我 是故敬禮無上尊」(『大正藏』卷十一、838a3) とある。

(11) 又云く 南本卷八、如來性品に「如來祕藏亦無有我。凡夫謂二。智者了達其性無二。無二之性即是實性。我與無我性無有二。如來祕藏其義如是。不可稱計無量無邊諸佛所讚。我今於是一切功德成就。經中皆悉說已。善男子。我與無我性

相無¹」(同前、651c13-18)とある。

(12) 二十五有 衆生の存在し得るすべての世界とそれらの世界に存在する衆生を数えて二十五種としたもの。欲界に四悪趣、四大洲、六欲天の計十四有、色界に四禪天と別出した大梵天、淨居天、無想天の三天を加えた七有、それに無色界の四空処を加えて二十五有とする。

【テキスト】 473b5-c4

問曰。若爾何得大智論云隨俗故說我也。

答曰。三教明我皆是隨情。豈非隨俗故說我也。圓教明我。即是佛性。佛性之我。即第一義。非隨俗也。三教明我聞。竝約耳根論聞。圓教明我。我即聞。以點色性說眞我。離法性更無別能聞之耳也。用四教約諸經。具我多少。類如是可知。

二約四教明聞義者。如涅槃經明聞義。自有四種。一聞聞。二不聞聞。三聞不聞。四不聞不聞。今約此四種聞義。恐是四教辯聞義不同也。三藏教即是聞聞義。以小生生大生。故名爲生生。今亦得云小聞成大聞。故名爲聞聞¹。

問曰。大涅槃明生生。即是十二因緣。相續不斷故名生生。今何得用小生生大生。類解聞聞義耶。

答曰。大涅槃釋生具有兩義。今不取約行明生生。但取約生滅之理明生生義者。若約十二因緣相續。以明生生。即於聖人聞經義不便也。所以者何。三藏教諸道人。十二因緣生生義已壞。但有報身八相之根塵和合。故稱聞也。

二通教即是不聞聞。如夢幻之間。即是點空說聞。名不聞聞也。三別教即是聞不聞義。於所聞法得自在。名聞不聞。所以者何。[473b] 世諦死時即聞聞死。而生聞持陀羅尼。隨有所聞。自在能持也。又攝大乘論說。有塵者應受識。即是別教大乘明聞也。

四圓教即是不聞不聞義。佛性大般涅槃聞相盡也。

(1) テキストに「大」の字はないが、テキスト欄外注記には「成下疑脱大字」とあり、『略疏』にも「今亦得云少聞成大聞故名聞聞」(『大正藏』卷三十八、569b19-20)とあって、意味上からも今、補う。

(2) テキスト欄外注記に「生上疑脱生字」とあるが、今は採らない。『略疏』も「彼經釋生具有兩義」(『大正藏』卷三十八、569b21-22)とあり、テキストと同じ。

【書き下し】

問うて曰く、若し爾らば何ぞ『大智論』は俗に隨うが故に我を説くと云うを得んや。^①

答えて曰く、三教に我を明かすは、皆な是れ情に隨う。豈に俗に隨うが故に我を説くに非ざるや。圓教に我を明かすは、即ち是れ佛性なり。佛性の我は即ち第一義なり。^②俗に隨うに非ざるなり。三教に我聞を明かすは竝に耳根に約して聞を論ず。圓教に我を明かすは我即ち聞なり。色性を點じて眞我を説き、^③法性を離れて更に別の能くこれを聞くの耳無きを以てなり。四教を用いて諸經に我を具すること多少なるに約するは、是くの如くに類して知るべし。

二に四教に約して聞の義を明かさば、『涅槃經』に聞の義を明かすが如し。^④自ら四種有り。一には聞聞。二には不聞聞。三には聞不聞。四には不聞不聞なり。今、此の四種の聞の義に約す。恐らくは是れ四教に聞の義を辯ずると同じからざるなり。三藏教は即ち是れ聞聞の義なり。小生は大生を生ずるを以ての故に名けて生生と爲す。今、亦た小聞は大聞を成すと云うを得るが故に名けて聞聞と爲す。

問うて曰く。大涅槃に生生を明かすは、^⑤即ち是れ十二因縁、相續して斷ぜざるが故に生生と名づく。今、何ぞ小生が大生を生ずるを用いて聞聞の義を類解することを得んや。

答えて曰く。大涅槃に生を釋するに具さに兩義有り。今、行に約して生生を明かすを取らず。但だ生滅の理に約して生生の義を明かすを取らば、十二因縁の相續に約して以て生生を明かすが若きは、即ち聖人の經を聞くの義に於いて、便ならざるなり。所以は何ん。三藏教の諸の道人は、十二因縁の生生の義、已に壞す。但だ報身の八相の根塵和合有り。故に聞と稱するなり。

二に通教は即ち是れ不聞聞なり。夢幻の聞の如し。即ち是れ空を點じて聞を説く。不聞聞と名づくるなり。⁶

三に別教は即ち是れ聞不聞義なり。聞く所の法に於いて自在を得。聞不聞と名づく。所以は何ん。世諦の死時は即ち聞・聞の死なり。而して聞持陀羅尼生ず。聞く所有るに隨つて自在に能く持するなり。

又、『攝大乘論』に説く。⁷「有塵とは應受識なり」と。即ち是れ別教の大乘に聞を明かすなり。

四に圓教は即ち是れ不聞・不聞の義なり。佛性・大般涅槃は聞の相の盡くるなり。

(1) 『大智論』は……を説く。『大智度論』卷第一に「答曰。佛弟子輩雖知無我。隨俗法說我。非實我也」(『大正藏』卷二十五、64a16-17)とある。

(2) 佛性の我は即ち第一義なり。南本『涅槃經』迦葉品に「善男子。我者即是如來藏義。一切衆生悉有佛性。即是我義」(『大正藏』卷十二、648b7-8)とあり、同じく師子吼品に「當爲汝分別解說。善男子。佛性者名第一義空。第一義空名爲智慧」(同前、767c18-19)とある。

(3) 色性を點じて眞我を説き、色形あるという本性に着目し依拠して眞の我を説く、の意。円教以外の三教では、耳根という色法としての耳によって我が「聞く」ということを論じているが、円教では我即聞なので、本質としての法性を媒介として眞実の我を説く、の意。

(4) 『涅槃經』……如し。南本『涅槃經』徳王菩薩品に「善男子。聞所不聞亦復如是。有不聞聞。有不聞不聞。有聞不聞。

有聞聞。云何不聞聞。善男子。不聞者名大涅槃。何故不聞。非有爲故。非音聲故。不可說故。云何亦聞。得聞名故。所謂常樂我淨。以是義故名不聞聞」(『大正藏』卷十二、735A1-6)とある。

- (5) 大涅槃に生生を明かす 南本『涅槃經』徳王菩薩品に「善男子。汝能如是至心聽法。是則名爲聞所不聞。善男子。有不聞聞。有不聞不聞。有聞不聞。有聞聞。善男子。如不生生不生不生不生不生。如不到不到不到不到。世尊。云何不生生。善男子。安住世諦初出胎時。是名不生生。云何不生生。善男子。是大涅槃無有生相。是名不生生。云何生生。善男子。世諦死時是名生生。云何生生。善男子。一切凡夫是名生生。何以故。生生不斷故。一切有漏念生故。是名生生。四住菩薩名生生不生。何以故。生自在故是名生生不生。善男子。是名内法」(『大正藏』卷十一、733D12-24)。とある。以下の、四教に「聞」を論ずる場合も、この『涅槃經』の文に基づく。

(6) 空を點じて聞を説く 一切空という立場に依拠して「聞」を論ずる、の意。

- (7) 『攝大乘論』に説く 真諦訳『撰大乘論』に「以應受識應知攝色等六外界。以正受識應知攝眼等六識界」(『大正藏』卷三十一、118b9-10)とある。

【トキスト】 473c4-24

問曰。若無聞相。云何説聞。

答曰。若聞相盡都不得聞者。佛住大涅槃。應都不聞一切十方法界音聲也。如法華經。明耳根功德。初相似聞盡。十方無數佛。百福莊嚴相。爲衆生説法。悉聞能受持。況法雲得分證眞實聞相盡。聞十方佛法。而能如雲持雨耶^①。

妙覺聞相究竟盡。一切法界所有音聲。一時聞也。故大涅槃云。若知如來常不説法。是則名爲具足多聞。此經亦云。其聽法者無聞無得。

今用四教明聞義。約衆經具聞多少。類前可知。

問曰。大智論明。佛法無我但有名字。順俗無諍。今何得分別四教明我不同。若爾便是有我也。

答曰。若定有我。何得四教分別不同。若定無我。何得經有此異說。若不許作此分別者。非但壞佛方便教門。亦各自壞諸不信者義宗也。若言五陰實無有我。但有名者。數人可得作此解。曇無德既有假我。何得用數人名字我聞不用假我聞。犢子既云。第五不可說藏有我。何得不用此我聞。而取名字我聞也。通教學既明幻化我。何得不用幻化我聞。而用數人名字我聞也。如此互相望諍論。互失也。

第三約觀心解我聞。三觀分別四教我聞。類如是細尋可知。

(1) 原テキストには「兩」とあるが、テキスト欄外注記に「兩應作雨」とある。また、『略疏』にも「如雲持雨耶」とある(『大正藏』卷三十八, 508c)。今、意味上からも「雨」に改める。

(2) テキスト欄外注記に「學下疑脫者字」とあるが、今は採らない。

【書き下し】

問うて曰く。若し聞の相なくんば、云何が聞を説くや。

答えて曰く。若し聞の相、盡くれば都て聞者を得ず。佛大涅槃に住して、應に都て一切十方法界の音聲を聞かざるなり。『法華經』の如きは、耳根の功德を明かす。初めに相似の聞盡く。十方無數の佛、百福莊嚴相もて、衆生の爲に説法す。悉く聞いて能く受持せん^②と。況や法雲の分證眞實の聞の相盡くるを得、十方の佛の法を聞いて、能く雲の雨を持するが如きをや。妙覺の聞の相、究竟して盡くるは、一切法界所有の音聲を一時に聞くなり。故に『大涅槃』に云く、若し如來常に説法せざるを知らば、是れ則ち名けて具足多聞と爲す^③と。此の經に亦た云く、其の法を聽く者は、聞無く得無し^④と。

今、四教を用いて聞の義を明かす。衆經の聞を具すること多少なるに約して前に類して知るべし。

問うて曰く、『大智論』に「佛法に我無く但だ名字有るのみ」と明かす。俗に順じて諍無し。今、何ぞ四教を分別して我を明かすこと不同なるを得んや。若し爾らば便ち是れ我有るなり。

答えて曰く、若し定んで我有らば、何ぞ四教もて不同を分別することを得んや。若し定んで我無くんば、何ぞ經に此の異説有ることを得んや。若し此の分別を作すを許さざれば、但だ佛の方便の教門を壞すのみに非ず、亦た各自ら諸の不信者の義宗を壞すなり。若し五陰に實には我有ること無く、但だ名有るのみと言わば、數人、此の解を作すことを得べし。曇無德に既に假我有り。何ぞ數人の名字の我聞を用いて假の我聞を用いざるを得んや。犢子は既に第五不可説藏に我有りと云う。何ぞ此の我聞を用いずして、名字の我聞を取ることを得んや。通教の學は既に幻化の我を明かせり。何ぞ幻化の我聞を用いずして、しかも數人の名字の我聞を用いることを得んや。此の如く互に相い望んで諍論すれば互いに失なり。

第三に觀心に約して我聞を解す。三觀に四教の我聞を分別す。類することはくの如し。細尋して知るべし。

- (1) 『法華經』の如きは……明かす 『妙法蓮華經』法師功德品に「復次常精進。若善男子善女人。受持此經。若讀若誦若解説若書寫。得千二百耳功德。以是清淨耳。聞三千大千世界。下至阿鼻地獄上至有頂。其中内外種種語言音聲。(中略) 以要言之。三千大千世界中。一切内外所有諸聲。雖未得天耳。以父母所生清淨常耳。皆悉聞知如是分別種種音聲。而不壞耳根」(『大正藏』卷九、4723-48a8) とある。
- (2) 十方無數の佛……受持せん 前注に出す『妙法蓮華經』法師功德品の偈頌部分に「十方無數佛 百福莊嚴相 爲衆生說法 悉聞能受持」(『大正藏』卷九、5099-10) とある。
- (3) 法雲的分證眞實の聞の相 菩薩の十地の階位における第十地を法雲地といい、それは円教の六即の階位からすれば眞

如を部分的に証得する分證即に相当する。その階位における「聞」のあり方、の意。

(4) 妙覺の間の相 妙覺は菩薩の修道の階位の究極の位で、仏位と同じ。六即では究竟即に相当する。その仏位における「聞」のあり方、の意。

(5) 『大涅槃』に云く 南本『涅槃經』徳王菩薩品に「若知如來常不說法。亦名菩薩具足多聞」(『大正藏』卷十二、764a-4)とある。

(6) 此の經に亦た云く『維摩經』弟子品に「是豈可說乎。夫說法者無說無示。其聽法者無聞無得」(『大正藏』卷十四、540a18-19)とある。

(7) 多少なる「多少」は、どれほど、どのくらい、の意。「花落知多少」(孟浩然「春曉」)

(8) 『大智度論』に 同論の卷十六に「盡知一切諸法因緣和合。但有名字實相不可得」(『大正藏』卷二十五、180a1-2)とある。

(9) 數人 說一切有部のこと。

(10) 曇無徳に既に假我有り 本論テキスト473a12-b5の部分の注(3)を参照。

(11) 第五不可說藏に……と云う 本論テキスト473a12-b5の部分の注(4)を参照。

【テキスト】 474a1-b5

一時

此即是四衆感教得道之時。此亦助成如是之可信也。故大智論云。論時方皆爲生信。今釋一時亦爲三意。一總解。二約教別解。三約觀心。第一總解者。大智論云。數時等實無陰持入所不攝。故但隨世俗。說一時無咎。上標章言。四衆感教得道之時。名一時者。此約多時少時。故名一時也。若通論四衆感一期教門。始終久近皆名一時。即是束

多時少時。共明一時也。如戒序云春分四月日爲一時^①。春分實有多時。但總束爲一時也。約得道明一時者。赴機說教。聞教即入如苦忍一刹那。此約少時明一時。今約此多時少時。總明一時。謂總一期說法。通是一時之事也。就此分別。略爲五意。一約衆生機發。明一時。二約佛說教。明一時。三約機教合。明一時。四約得道。明一時。五約阿難聞經明一時。

一機發明一時者。若世善機發時即是多時。出世善機發即是少時。總此多少皆一時也。

二約佛說教明一時者。方便用三悉檀起教即是多時。實慧用第一義悉檀起教即是少時。總此多少皆名一時也。

三約教與機合明一時者。權教與世間善根合即是多時。實教與出世善根合即是少時。機教合故不在二時。故名一時也。

四約四衆得道明一時者。若得世間之道即是多時。若得出世間之道即是少時。總此多少皆名一時也。

五約阿難聞經明 [474b] 一時者。佛說經多時少時。即是阿難聞經時。聞非異時故名一時。又阿難得佛覺三昧。所未聞經以三昧力。悉皆得聞入三昧聞故名一時。又解。佛爲阿難重說。即是阿難聞經時名一時也。

(1) テキスト欄外注記に「時上疑脫一字」とあり、意味上「一」を補う。『略疏』はテキストと同じで「如戒序云。春分四月日爲時」(『大正藏』卷三十八、569c20)とある。

【書を下し】

一時

此れ即ち是れ四衆、教を感じ得道するの時なり。此れ亦た如是の信すべきを助成するなり。故に『大智論』に云く、^①「時と方を論ず。皆、信を生ぜんが爲なり」と。今、一時を釋するに亦た三意と爲す。一に總解。二に教

に約して別解す。三に觀心に約す。

第一に總じて解すとは、『大智論』に云く、「數時等、實に無し。陰・持・入の攝せざる所なればなり。故に但だ世俗に隨て、一時と説くのみにして咎無し」と。上の標章の言の「四衆、教を感じ得道するの時」を一時と名づくるとは、此れ多時少時に約するが故に一時と名づくるなり。若し通じて論せば、四衆は一期の教門を感じ、始終・久近は皆な一時と名づく。即ち是れ多時少時を束ねて、共に一時を明かすなり。『戒序』に云うが如し。^④

「春分四月の日を一時と爲す」と。春分は實に多時有り。^⑤但だ總て束ねて一時と爲すなり。

得道に約して一時を明かすとは、機に赴いて教を説く。教を聞いて即ち入ること苦忍の一刹那の如し。^⑥此れ少時に約して一時を明かす。

今、此の多時少時に約して、總じて一時を明かす。謂く、一期の説法を總ずるに、通じて是れ一時の事と謂うなり。此れに就いて分別して、略して五意と爲す。一に衆生の機の發するに約して一時を明かす。二に佛の説教に約して一時を明かす。三に機と教の合するに約して一時を明かす。四に得道に約して一時を明かす。五に阿難が經を聞くに約して一時を明かす。

一に機發して一時を明かすとは、若し世の善機發する時、即ち是れ多時なり。出世の善機發すれば即ち是れ少時なり。此の多少を總ずるに、皆一時なり。

二に佛が教を説くに約して一時を明かすとは、方便に三悉檀を用いて教を起すは即ち是れ多時なり。實慧に第一義悉檀を用いて教を起すは、即ち是れ少時なり。此の多少を總ずるに、皆、一時と名づくるなり。

三に教と機と合するに約して一時を明かすとは、權教と世間の善根が合すれば、即ち是れ多時なり。實教と出世の善根と合すれば、即ち是れ少時なり。機と教が合するが故に二時に在らず。故に一時と名づくるなり。

四に四衆の得道に約して一時を明かすとは、若し世間の道を得ば、即ち是れ多時なり。若し出世間の道を得ば、

即ち是れ少時なり。此の多少を總ずるに、皆、一時と名づくるなり。

一五に阿難が經を聞くに約して一時を明かすとは、佛、經を説きたもうこと多時少時なり。即ち是れ阿難が經を聞く時、聞くこと異時に非ざるが故に一時と名づく。又、阿難、佛覺三昧⁸を得て、未だ聞かざる所の經を三昧力を以て、悉く皆聞くことを得。三昧に入つて聞くが故に一時と名づく。

又、解す。佛は阿難の爲に重ねて説きたもう。即ち是れ阿難が經を聞く時を一時と名づくるなり。

(1) 『大智論』に云く、同論の卷二に「經住王舍城。論今當説。問曰。何以不直説般若波羅蜜法。而説佛住王舍城。答曰。説方時人。令人心生信故」(『大正藏』卷二十五、75c13-15)とある。

(2) 『大智論』に云く、同論の卷一に「一者今當説。問曰。佛法中數時等法實無。陰入持所不攝故。何以言一時。答曰。隨世俗故有一時無有答」(『大正藏』卷二十五、64c12-14)とある。

(3) 陰・持・入 陰界入のこと。「持」は「界」に同じ。

(4) 『戒序』に云うが如し『戒序』は『梵網經菩薩戒序』で『梵網經』の卷下の前に置かれるが、『大正藏經』第二十四卷所収の『梵網經』テキスト中の『戒序』には該当する文がない。しかし、『新纂大日本統藏經』卷三十八所収の、紹聖三年(1096)に北宋の慧因が注した『梵網經菩薩戒注』のテキスト中の序文には、

「諸大德春分四月日為一時」[551b5]

「半月日已過」[551b8]

「少一夜餘有一夜三月半在」[551b12]

とあり、春分四ヶ月を束ねて一時とするとある。

(5) 春分は實に多時有り 前注(4)の慧因の注には「從臘月十六至四月十五春分。四月十六至八月十五夏分。八月十六

至臘月十五冬分」(『新纂大日本統感經』卷三十八、551b6)とあり、春分は十二月十六日より四月十五日までの四ヶ月あつて、他の夏分や冬分よりも期間が長い。これを「多時」といったもの。

- (6) 苦忍の一刹那 修道の階位のうち、四諦の真理を証得する見道位に十六心あるうち、その最初の苦法智忍のこと。欲界の苦諦を觀察して、苦諦の下の五見などの十煩惱を断ずる段階をいう。この断尽は一念になされるので一刹那という。
- (7) 三悉檀 四悉檀のうちの第一義悉檀を除く世界悉檀、各各為人悉檀、対治悉檀をいう。

- (8) 佛覺三昧 仏の悟りを証得する三昧のこと。湛然の『法華文句記』によれば、「言佛覺者。祇是佛加。覺力如佛故名佛覺三昧」(『大正藏』卷三十四、161c22-23)云々。

【テキスト】 474b-c1

第二約教明一時者。即是約四教分別四種一時義也。^①一約三藏因緣生滅教。明一時。亦具前五種一時之義。或用隨俗時。或用因緣假名時。^②離法無別時。以爲一時也。二約通教明一時。亦具前五種一時之義。如夢之一時也。三別教明一時。亦具前五種一時之義。破一時顛倒。能分別數一切法。見三世事無滯礙也。攝大乘論明。數識攝阿僧祇明世識攝三世。若約此一時。即是別教一時。四圓教明一時。^③亦具前五種一時義。但圓教正約不思議法性明一時。一切入一時。如此經明住不思議解脫。菩薩七日爲一劫。一劫爲七日。法華經明六十小劫。謂如食頃。華嚴明十一切等。約此明一時。即是圓教一時義也。若用四教明一時。約衆經具一時。多少竝類如是可知。

第三約觀心一時義者。觀心生滅義。心在定時。能知世間生滅法相。是則一念中慧眼開發。能見生滅之理故名一時。若非定心。少時豁然見理。前思後覺。憶想顛倒。雖有解心生滅。不能見理。非一時也。又約觀心明一時。體假入空。觀慧眼開。一時。從空入假。觀法眼開。一時。中道正觀佛眼開。一時。皆是定心一念。少時豁然開發。即見眞一實諦理。名 [474c] 一時也。

- (1) テキスト欄外注記に「二下疑脱時字」とあり、意味上からも今、「二」の字を補う。
- (2) テキストには「法」とあるが、欄外注記に「法疑誤當作緣」とあり、意味上からも今、「緣」に改める。
- (3) テキスト欄外注記に「亦上疑脱四圓教明一時六字」とあり、また意味上、表現上の必要性から「四圓教明一時」の六字を補う。
- (4) テキスト欄外注記に「名故疑写倒」とあり、『略疏』にも「則一念慧眼開發見生滅之理。故名一時」(『大正藏』卷三十八、570A15)とあるので、今、改める。

【書き下し】

第二に教に約して一時を明かすとは、即ち是れ四教に約して四種の一時の義を分別するなり。

一に三藏の因縁生滅の教に約して一時を明かす。亦た前の五種の一時の義を具す^①。或は隨俗の時を用い、或は因縁假名の時を用う。法を離れては別の時無く、以て一時と爲すなり。

二に通教に約して一時を明かす。亦た前の五種の一時の義を具す。夢の一時なるが如きなり。

三に別教に一時を明かす。亦た前の五種の一時の義を具す。一時の顛倒を破し、能く數もて一切法を分別して^②、三世の事を見ること滯礙無きなり。『攝大乘論』^③に數識が阿僧祇を攝することを明かし、世識が三世を攝することを明かす。若し此の一時に約すれば、即ち是れ別教の一時なり。

四に圓教に一時を明かす。亦た前の五種の一時の義を具す。但だ圓教は正しく不思議法性に約して一時を明かすのみ。一切は一時に入ること、此の經が不思議解脱に住する菩薩は七日を一劫と爲し、一劫を七日と爲すと明かすが如し。『法華經』^④は六十小劫は食頃の如しと謂うと明かし、『華嚴』^⑤は十の一切を明かす等の如し。此れに

約して一時を明かす。即ち是れ圓教の一時の義なり。若し四教を用いて一時を明かさば、衆經に一時を具するに約す。多少は並びに是くの如きに類して知るべし。

第三に觀心に約する一時の義とは、因縁生滅の義を觀心す。心、定に在る時、能く世間の生滅の法相を知る。是れ則ち一念中に慧眼開發し、能く生滅の理を見るが故に一時と名づく。若し定心にして少時に豁然と理を見るに非れば、前に思い、後に覺り、憶想し顛倒す。心の生滅を解すること有りと雖も、理を見ること能わず。一時に非ざるなり。

又、觀心に約して一時を明かすに、假を體し、空に入り、觀慧の眼開く。一時なり。空従り假に入り、觀法の眼開く。一時なり。中道正觀して佛眼開く。一時なり。皆な是れ定心の一念なり。少時に豁然として開發す。即ち眞の一實諦の理を見るを一時と名づくるなり。

(1) 前の五種の一時の義 前段 (T44p1-25) の、(一) 衆生の機が発するに約して一時を明かす、(二) に仏の説教に約して一時を明かす、(三) 機と教の合するに約して一時を明かす、(四) 得道に約して一時を明かす、(五) 阿難が經を聞くに約して一時を明かす、の五つの場合における五種の一時をいう。

(2) 能く數もて……分別して 後文に數識について述べているので、ここは數量によつて一切の存在、自性を區別することができ、の意に解す。

(3) 『攝大乘論』に 世親造・真諦訳『撰大乘論釈』に「世識謂生死相續不斷識。數識謂從一乃至阿僧祇數識」(『大正藏』卷三十一、181c12-13) とある。

(4) 此の經が『維摩經』不思議品に「又舍利弗。或有衆生樂久住世而可度者。菩薩即延七日以爲一劫。令彼衆生謂之一劫。或有衆生不樂久住而可度者。菩薩即促一劫以爲七日。令彼衆生謂之七日」(『大正藏』卷十四、546c8-12) とある。

(5) 『法華經』は『妙法蓮華經』序品に「時會聽者亦坐一處。六十小劫身心不動。聽佛所說謂如食頃」(『大正藏』卷九、4a2627) なる。

(6) 『華嚴』は『華嚴經』は十種は一切妙音声雲、十種は一切智、十種は一切処など、多くの十の一切を説いており、どの十種は一切かは特定できない。『華嚴經』は教理や事物などについて、十の法数でひとまとまりにしたものが多い。

【テキスト】 474c2-20

佛在

佛即能説如是之化主。亦爲助成傳聞之可信也。所以者何。若是九十六種所説邪見顛倒故。自不足歸心。若是三乘聖人所説。既猶居不極之位。所説又非究竟。今明。無師大覺朗然頓悟。所言誠諦從是聞經物情欣愜也。就此亦爲三意。一總明佛住。二約教分別佛住不同。三約觀心解釋。第一總明佛住義者。舊稱佛陀。此言覺者。自覺覺他名之爲佛。若智度論明佛陀言知者。知何等法。智慧知未來現在衆生數非衆生數有常無常一切諸法。菩提樹下了了覺知。故名爲佛。十號具足亦名一切智人。亦名婆伽婆。佛德無量。勝名亦復無量。今不具釋。所言在者。在即住之異名耳。大智論云。四種身威儀坐臥行住。是名爲住。住有四種。一者天住。二者梵住。三者聖住。四者佛住。天住者布施持戒善心三事。故名天住。梵住者住四禪四無量心四無色定也。聖住者住空無相無作四諦十二因緣理也。佛住者佛住首楞嚴等無量三昧十力等一切佛法也。如佛所得法。佛於中住。憐愍衆生故。在毗耶離住也。

(1) 原テキストは「頰」に作るが、テキスト欄外注記に「頰疑誤當作婆」とあり、テキストの後の文にも「婆伽婆」とある。また元来、bhagavatの音写語であるという点からも今、改める。

(2) テキスト欄外注記に「勝略疏作稱」とあるが、意味上齟齬を来さないでテキスト通りとする。

【書き下し】

佛在

佛は即ち能く如是を説くの化主なり。亦た傳聞の信ずべきを助成するを爲すなり。所以は何ん。若し是れ九十六種の所説ならば、邪見顛倒なるが故に、自ら心を歸すに足らず。若し是れ三乗の聖人の所説ならば、既に猶お不極の位に居す。所説、又、究竟に非ず。今、明かさく。無師の大覺、朗然として頓悟し、言う所は誠諦なり。是れ従り經を聞いて、物の情、欣愜なり。^②此に就いて亦た三意と爲す。一には總じて佛住を明かす。二には教に約して佛住の不同を分別す。三には觀心に約して解釋す。

第一に總じて佛住の義を明かすとは、舊に佛陀と稱す。此に覺者と言う。自覺・覺化これを名けて佛と爲す。『智度論』の若きは佛陀を明かして知者と言う。「何等の法を知るや。智慧にて未來・現在・衆生數・非衆生數・有常・無常・一切諸法を知る。菩提樹下に了了覺知するが故に名けて佛と爲す」と。十號具足を亦た一切智人と名づく。亦た婆伽婆と名づく。佛徳無量なれば、勝名も亦復た無量なり。今、具さには釋せず。

言う所の在とは、在は即ち住の異名なるのみ。『大智論』に云く、「^④四種の身の威儀、坐臥行住、是れを名づけて住と爲す。住に四種有り。一には天住。二には梵住。三には聖住。四には佛住なり。天住とは布施・持戒・善心の三事の故に天住と名づく。梵住とは四禪・四無量心・四無色定に住するなり。聖住とは空・無相・無作・四諦・十二因縁の理に住するなり。佛住とは、佛が首楞嚴等の無量の三昧、十力等の一切佛法に住するなり。佛の所得の法の如し。佛は中に於いて住す」と。衆生を憐愍するが故に毗耶離に在^⑤つて住するなり。

(1) 九十六種の所説 九十六術の外道説。九十六種外道。大小乗の經典や論書に出る、仏在世當時、王舍城にいた外道の

総称。たとえば、吉蔵『三論玄義』には「外道多端。略陳其二。一天竺異執。二震旦衆師。總論西域九十六術。別序宗要則四執盛行。一計邪因邪果。二執無因有果。三立有因無果。四辨無因無果」(『大正蔵』卷四十五、1b10-14)とある。

(2) 物の情、欣愜なり「物」は衆生の意。「情」は心、「欣愜」は、嬉しく、快いの意。

(3) 『智度論』の若きは『大智度論』巻一に「復名佛陀。(秦言知者。知何等法。知過去未來現在衆生數非衆生數有常無常等一切諸法。菩提樹下了了覺知故。名爲佛陀) (〽) 部分は割り注) (『大正蔵』卷二十五、72a35) とある。

(4) 『大智論』に云く『大智度論』卷三に「説方時人。令人心生信故。云何名住。四種身儀坐臥。行住是名住。又以怖魔軍衆。自令弟子歡喜入種種諸禪定故。在是中住。復次三種住。天住梵住聖住。六種欲天住法。是爲天住。梵天等乃至非有想非無想天住法。是名梵住。諸佛辟支佛阿羅漢住法。是名聖住。於是二住法中住聖住法。憐愍衆生故。住王舍城。善心三事故名天住。慈悲喜捨四無量心故名梵住。空無相無作。是三三昧名聖住。聖住法佛於中住。復次四種住。天住・梵住・聖住・佛住。三住如前説。佛住者。首楞嚴等。諸佛無量三昧十力四無所畏十八不共法一切智等種種諸慧。及八萬四千法藏度人門。如是等種種諸佛功德。是佛所住處」(『大正蔵』卷二十五、75c15-76a7) とある。

(5) 毗耶離 毘舍離あるいは吠舍離とも。ヴァイシャーリーの音写語。Vaisālī (パーリ: Vesālī)。古代インドのヴァツジ国にあった商業都市で、『維摩経』説法場所。現在のバトナの北。この地は釈尊が好んだ場所であったようで、仏によるこの地に対する好意的記述が残っている。

【ヒキヌー】 474c20-475a13

第二別約教釋佛住義不同者。即是約四教明不同也。四教明佛義。分別已略在玄疏。但爲化四種根性衆生。現相亦有四種。如初成道起轉法輪。入般涅槃。皆現四教身相不同。初成「[Vāsa]」現身相不同者。如勝天王般若所明。如來初坐道樹。得成正覺。或現坐草。或現坐天衣。或現處寶座。或現在虛空中。此即初正覺赴緣。應化現相不同。

表四教所明佛功德相不同也。

次明轉法輪現身相不同者。若說華嚴圓滿頓教則現大相小相之身。若鹿野轉生滅四諦法輪。即脫瓔珞。現老比丘之身。若說大乘方等。即門內尊特之身。或門外塵土垢身之像。若說摩訶般若。亦現門內尊特之身。及種種佛身之相。以衆生疑故。現常身放常光。若說法華。但現尊勝之相。若說涅槃。備現四種身相事。同方等現身相。此略明轉示現身相不同。如是隨緣感種種之身。何但現四種身相也。今一往約四教不同。大略而言四種現相耳。

(1) 原テキストには「明」の下に「明」があつて重複する。テキスト欄外注記には「明疑剩」とあり、意味上からも「明」の一字を削除する。

(2) テキスト欄外注記に「轉下疑脫法輪二字」とあるが、今は採らない。

【書き下し】

第二に別して教に約して佛住の義不同なるを釋すとは、即ち是れ四教に約して不同を明かすなり。四教に佛の義を明かし、^①分別し已わりて略して玄疏に在り。^②但だ四種の根性の衆生を化す爲に、相を現すること亦た四種有り。初に成道して轉法輪を起こし、般涅槃に入るが如し。皆四教の身相を現すること不同なり。初めに現身の相を成ずること不同とは、『勝天王般若』の明かす所の如し。^③「如來は初め道樹に坐し、正覺を成ずることを得、或は草に坐するを現じ、或は天衣に坐することを現じ、或は寶座に處すことを現じ、或は虛空中に在ることを現ず」と。此れ即ち初めに正覺して緣に赴き、應化して相を現すること不同なり。四教の明かす所の佛の功德の相不同なるを表すなり。

次に法輪を轉じて身相を現すること不同なるを明かすとは、若し華嚴圓滿頓教を説かば、則ち大相小相の身を

現じ、若し鹿野に生滅の四諦法輪を轉ぜば、即ち瓔珞を脱し、老比丘の身を現ず。若し大乘方等を説かば、即ち門内の尊特の身⁽⁴⁾、或は門外の塵土垢身の像なり⁽⁵⁾。若し摩訶般若を説かば、亦た門内尊特の身、及び種種の佛身の相を現ず。衆生疑うを以ての故に、常に身に常光を放つを現ず。若し法華を説かば、但だ尊勝の相を現ず。若し涅槃を説かば、備さに四種の身相の事を現ず。方等の身相を現ずるに同ず。此れ略して轉じて身相を示現すること異なるを明かす。是くの如く隨縁して種種の身相を感じず。何ぞ但だ四種の身相を現ずるのみならんや。今、一往、四教の不同に約して、大略して四種に相を現ずると言うのみ。

(1) 四教に……明かし「四教」は『四教義』のような特定の文献名を指すか、あるいは化法の四教のことか、未検。

(2) 略して玄疏に在り『玄疏』がどの文献を指すのか不明。守篤は『四教義』中の卷七(三藏教)、八(通教)、九(別教)、十一卷(円教)というが、『籤録』卷一、二十二才、『維摩經玄疏』、あるいは『法華玄義』卷十、判教相の可能性もある。

(3) 『勝天王般若』の明かす所『勝天王般若波羅蜜經』卷四、平等品に「亦復有人不見此事。或有衆生但見菩薩敷草而坐。或見菩薩處大師子寶臺而坐。或見菩薩在地而坐。或見空中自然而有師子之座菩薩安坐。或有衆生見阿說他樹爲菩提樹。或見波利質多羅樹。或見衆寶合成爲菩提樹。或有衆生見菩提樹高七多羅樹。或有衆生見菩提樹高八萬四千由旬。師子之座高四萬二千由旬。或有衆生遙見菩薩遊戲空中。或見菩薩坐菩提樹。舍利弗。菩薩摩訶薩行般若波羅蜜。以方便力示現如是種種神變化度衆生」(『大正藏』卷八、700c13-23)とあるを指すか。灌頂の『大般涅槃經疏』には「勝天王中。初坐樹下有四種相。或見坐祥草。或見坐天衣。或見坐七寶。或見坐虛空」(『大正藏』卷三十八、589b-10)とあり、テキストの引用文に近い。

(4) 門内の尊特の身『妙法蓮華經』信解品の長者鬍子の喩に基づいた表現。邸宅門内にいる長者は財富無量で、種種の

嚴飾あつて威德特尊であると説かれている。信解品に「爾時窮子。備質展轉遇到父舍住立門側。遙見其父踞師子床寶机承足。諸婆羅門刹利居士皆恭敬圍繞。以眞珠瓔珞價直千萬莊嚴其身。吏民僮僕手執白拂侍立左右。覆以寶帳。垂諸華幡。香水灑地。散衆名華。羅列寶物出入取與。有如是等種種嚴飾。」(『大正藏』卷九、16c12-17)。

(5) 門外の塵土坊身の像 前注(4)と同じく『妙法蓮華經』信解品の長者窮子の喩に基づいた表現。長者の邸宅の門外に佇む窮子は、塵まみれの不浄な様相をしていたと説かれる。すなわち、信解品に「又以他日於窓牖中遙見子身。羸瘦憔悴。糞土塵空汚穢不淨」。(『大正藏』卷九、17a14-15)とある。

【テキスト】 475a13-16

次明入涅槃現四種身相不同者。如像法決疑經云。如來將入涅槃。是時大衆。或見佛如沙門之像。或見佛威德相好端嚴。或見佛坐寶蓮華。說心地法門。或現見身如虛空無有邊表。此豈非表說四教之功已訖。將入涅槃現此相也。此經既是方等教。攝住於毗耶離城。說大乘方等。所可現身。亦應隨緣感現。故此經長者子寶積。說傷歎言。各見世尊在其前。斯則神力不共法。各見者四教之機。感佛身相不同也。

問曰。四教善根隨緣所見定。如前分別不。

答曰。一往相對理。在隨緣機感。若就其部邊云。可見劣身而說勝法。如觀世音以種種形。遊諸國土說大乘法。豈況如來雖現劣身。何妨說勝法也。

次用四教明住義者。各隨教所辨佛法門不同。佛於中住憐愍衆生。故住毗耶離也。

第三約觀心明佛住義者。如華嚴經云。欲見如來心。但觀衆生心即見如來心。所以者何。一心三觀。圓觀因緣三諦之理。即是開佛知見。雖有肉眼。名爲佛眼。亦名種智。若用三智。以不住三諦三昧亦是如佛所得之法。佛於中住憐愍衆生。能不捨道法。現凡夫事。住一切世間法也。此須善用六即分別。入大乘之要門也。

(1) テキスト欄外注記に「現見疑寫倒」とあり、『略疏』には「或見身如虚空無有邊表」(『大正藏』卷三十八、570b20)とある。テキストの「現見」の二字のうち、「現」の一字は写誤による衍字の可能性もある。しかし、今はテキスト通りとする。

(2) テキスト欄外注記に「見心即疑誤當作心即見」とあり、『略疏』にも「華嚴云欲見如來心但觀衆生」(『大正藏』卷三十八、570b29-c1)とある。意味上からも「見心即」を「心即見」と改める。

(3) テキスト欄外注記に「住下疑脫法住二字」とあり、『略疏』にも「若用三智以不住法住三諦三昧」(『大正藏』卷三十八、570c2-3)とあるが、今はテキスト通りとする。

【書き下し】

次に涅槃に入りて四種の身相を現ずること異なるを明かすとは、『像法決疑經』に云うが如し。⁽¹⁾「如來將に涅槃に入りたもう。是の時、大衆、或いは佛、沙門の像の如くなるを見る。或いは佛、威徳相好端嚴なるを見る。或いは佛、寶蓮華に坐して心地法門を説くを見る。或いは現じて身は虚空の如く邊表有ること無きを見る」と。此れ豈に四教を説くの功、已に訖るを表すに非ざらんや。將に涅槃に入りて此の相を現ずるなり。

此の經、既に是れ方等教にして攝して毗耶離城に住して大乘方等を説く。現すべき所の身、亦た應に感に隨緣して現ずべし。故に此の經の長者子寶積、偈を説いて歎じて言わく、「各、世尊、其の前に在るを見る。斯れ則ち神力の不共法なり」と。各、見る者、四教の機、佛身の相を感ずること不同なり。

問うて曰く。四教の善根、隨緣して見る所の定は、前に分別するが如きや不や。

答えて曰く。一往は相對の理、隨緣して機の感ずるに在り。若し其の郭邊に就いて云わば、劣身にして勝法を

説くを見るべし。觀世音の如きは種種の形を以て、諸の國土に遊び大乘法を説く。豈に況んや如來は劣身を現すと雖も、何ぞ勝法を説くを妨げんや。

次に四教を用いて住の義を明かさば、各、教の辨ずる所の佛地法門の不同なるに隨つて、佛は中に住して衆生を憐愍す。故に毗耶離に住するなり。

第三に觀心に約して佛住の義を明かさば、『華嚴經』に云うが如し。^③「如來心を見んと欲せば、但だ衆生心を觀ぜよ。即ち如來心を見る」と。所以は何ん。一心三觀もて因緣三諦の理を圓觀せば、即ち是れ佛知見を聞くなり。^④肉眼有りと雖も、名けて佛眼と爲す。亦た種智と名づく。若し三智を用い、不住を以てせば、三諦三昧、亦た是れ佛所得の法の如し。佛は中に住して衆生を憐愍し、能く道法を捨てず。凡夫の事を現じ、一切世間法に住するなり。此れ須く善く六即を用いて分別し、大乘の要門に入るべきなり。

(1) 『像法決疑經』に云うが如し 同經に「善男子。今日座中無央數衆各見不同。或見如來入般涅槃。或見如來住世一劫。或見如來住無量劫。或見如來丈六之身。或見小身。或見大身。或見報身坐蓮華藏世界海為千百億刹迦牟尼佛說心地法門。或見法身同於虛空無有分別無相無得遍周法界」(『大正藏』卷八十五、1337a-11)とある。

(2) 偈を説いて歎じて言わく 『維摩經』仏國品に「各見世尊在其前 斯則神力不共法 佛以一音演說法 衆生隨類各得解」(『大正藏』卷十四、538d-2)とある。

(3) 『華嚴經』に云うが如し 智顛『維摩經玄疏』に「故華嚴經云。欲知如來心但觀衆生心。譬如一微塵中有三千大千世界經卷」(『大正藏』卷三十八、549d-2)とあり、湛然の『略疏』にも「華嚴云欲知如來心但觀衆生心。若見如來心即見衆生心。如破一微塵出大千經卷」(同前、588c18-20)とあって、下線部分が同一の『華嚴經』の引文があるが、『六華嚴』には「欲知如來心」に続く「但觀衆生心」の文はない。經の卷三十五の如來性起品には「欲知如來心應解最

勝智 如來智無量最勝心亦然」(『大正藏』卷九、621a27-28)の偈がある。

(4) 佛知見を開く、仏の悟りの智慧による見解を説き示す、の意。『妙法蓮華經』方便品に「諸佛世尊。欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世」(『大正藏』卷九、723c-25)とある。

(5) 三智 空諦を照了する一切智、仮諦を照了する道種智、中諦を照了する一切種智をいう。

(6) 六即 円教における菩薩の修道階位。理即、名字即、觀行即、相似即、分真即、究竟即をいう。

Summary

An annotated Japanese-translation of Zhiyi's *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 (4)

FUJII Kyoko

The *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 is a Zhiyi's commentary on the text of Kumārajīva's translation of the *Vimalakīrti-nirdeśa-sūtra* (*Weimojie suoshuo jing* 維摩詰所說經).

Zhiyi 智顛 (538–597) composed the commentary with twenty-five fascicles in his latest years at the request of Prince Guang of Jin. After Zhiyi died, his disciple Guanding 灌頂 (561–632), the fourth patriarch of the Tiantai school, made up the commentary to twenty-eight fascicles. This Zhiyi's commentary seemed to have been one of the most important works to research his latest doctrinal thought by the reason that the work had been dictated by himself. In spite of that, the commentary had not been studied so often because of its great amount. Since Zhanran 湛然 (711–782) had distilled the Zhiyi's *Weimojing wenshu*, and made the *Weimo jing lue shou* 『維摩經略疏』 with 10 fascicles, his concise commentary was generally available for study on the *Weimojie suoshuo jing* in Tiantai school. In the above circumstances, at the present, although Zhanran's concise commentary is put in *Taishō shinshū daizōkyō* 『大正新脩大藏經』, Zhiyi's is not in spite of its value.

Recently some new studies on Zhiyi's commentary have been made in overall aspects, that is, from philological study to doctrinal thoughts one. Among them, Dr. Shunei Hirai's study is notable in pointing that not only in the Guanding's additional part of the Zhiyi's commentary but also in the Zhiyi's own dictation part, Guanding's additions from Jizang's 吉藏 (549–623) works, were to be discovered in the existing text. Scrutinizing the

citations from Jizang's works, these citations on Zhiyi's dictation part turned out to be trivial, in terms of his doctrinal thought. Therefore it can be safely said that Zhiyi's commentary is as valuable as it thought to be.

The author decided to make an annotated Japanese-translation of the *Weimojing wenshu*, which has not yet been made in Japan. The author used 『維摩經文疏』 (Sūtra Number 338, vol. 18 of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* 新纂大日本統藏經 as original. It comprises 90 volumes, including 2 catalogues, which has been published from 1975 to 1980 by Kokusho Kankōkai 国書刊行会, mainly edited by Dr. Kosho Kawamura 河村孝照. And this newly edited Chinese Buddhist canon features great easy-of-use, which is succeeded from *Taishō shinshū daizōkyō* 大正新脩大藏經 in its form. And now one has access to Electric-text version of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* via web site of CBETA (Taiwan-based Chinese Buddhist Electronic Text Association 中華電子佛典協會.)

This instalment contains merely a few paragraphs, i.e. from X.18.471c11 to X.18.475b9. I intend to continue publication of the annotated translation in the future issues.

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*